

『知的生産の技術』元原稿/オリジナル原稿用紙 F0127

あるく、ウメサオタダオ展



1969年 49歳のころ



『知的生産の技術』（1969年）の手がき原稿が残っています。出版社から印刷所に回された原稿を返してもらって、自分で製本し、残しておいたのです。一般に作家たちは四百字の原稿用紙をもちいますが、梅棹は二百字の原稿用紙を特別注文していました。『知的生産の技術』（1969年）では、「もし日本語がタイプライターで書けたら、原稿用紙はもういらなだろう」と書いています。日本語のワープロが登場して漢字変換ができるようになったのは1978年のことです。